

上越・東黒沢～ナルミズ沢

--- 天上のプロムナードを目指して ---

(2006年8月の記録)

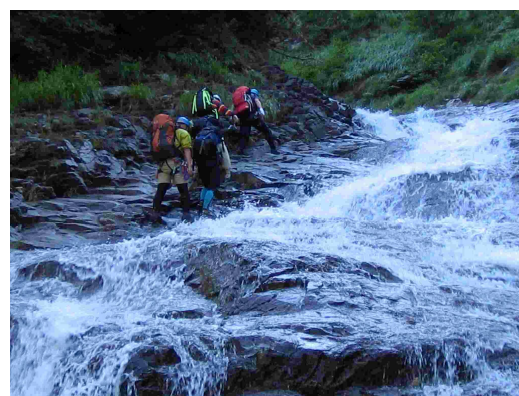
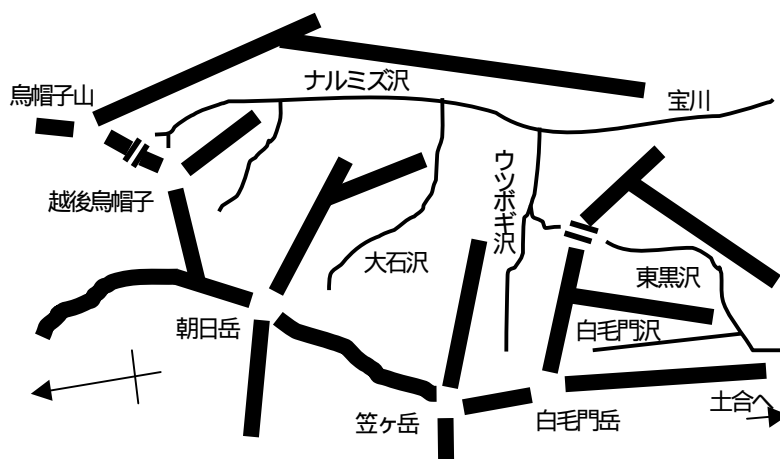
彷徨倶楽部

秋田 誠

この山行は、2006年度滋賀労山教育部技術アップ講習会の一環として計画、実施された。

日 程：2006年8月5日(土)～6日(日)

参加者：L秋田誠、SL谷口資康、山田英夫、高田長一(以上、彷徨倶楽部)SL土方敦(比良雪稜会)小枝琢三、秋元喜弘(以上、滋賀山友会)[以上、講師]高田忠雄、(彷徨倶楽部)前田真砂子、秋元尚子(以上、滋賀山友会)村田啓二、北村きよ美(以上、湖南岳友会)[以上、受講生]



東黒沢・鼻毛ノ滝を攀る

8月5日(土)快晴

東黒沢出合 8:25 --- ハナゲノ滝下 8:50～9:00 --- 二俣(標高900メートル) 9:45 --- 奥ノ二俣(標高1,080メートル) 11:20～11:30 --- 白毛門岳東尾根のコル(標高1,350メートル) 12:50 --- 広河原 13:50～14:10 --- 大石沢出合(標高1,350メートル、泊地) 15:40

鼻毛ノ滝、落差30メートル。コミカルな名に似あわぬ美しい滝だ。緩やかな逆相の岩肌に清冽な流れを躍らせている。水量の少ない今朝は、どこでも好き放題に攀れてしまいそうである。水流の左の乾いた岩を拾って落ち口の5メートルほど下まで登ると、よく踏まれた巻き道が私たちを美しい滑の煌めく滝の落ち口へと導いた。

白毛門沢出合を過ぎてしばらく流れをたどると、兩岸は幅1.5メートルに狭まり、長さ10メートルほどの小さなゴルジュとなる。ゴルジュの奥には落差2メートルの滝が一手に流れを落していた。まるで通せんぼをしているかのようだ。全体、東黒沢は流れのすぐ際まで豊かな樹林が茂っており、ゴルジュと云えるのはこの1箇所だけだった。私は腰まで浸かり左岸の被った壁から水線沿いにトラバースして小滝の上に立った。右岸をへつたり、淵を腹まで浸かって直接小滝に取り付いたり、皆思い思いのルートでこのゴルジュを通過した。小滝に続く4メートル滝で谷は左に屈曲していた。滝は谷幅いっぱい浅い釜を広げ、四半円形に釜を囲む側壁からは枝沢が1.5メートル滝となって落ちてい

た。なおも遡ると、流れを南北に等しく分けて分岐する二俣となった。地図には南の支流に沿う道が記されていたが、見渡すところそれらしい形跡は見当たらなかった。

私たちは白毛門から東に伸びる尾根のコルを目指して左俣に進んだ。1本の長大な滑滝となった谷の遡行は愉快そのもので、その規模は笛吹川釜ノ沢の千丈ノ滑の数倍に及ぶだろう。ジャブジャブと飛沫を飛ばし流れを乱して遡る真夏の爽快な谷歩き。滑の途中にはほど良い間隔で8メートルと15メートルの滝が現れ、遡行にアクセントがついた。水量比の等しい二俣をふたつ、いずれも左俣に進んだ。やがて沢幅が狭まり流れが細くなると、間もなく標高1,080メートルの奥ノ二俣だった。

色褪せた赤布が進むべき進路を私たちに告げていた。出合をブッシュに覆われた細い右俣に踏み入ると、登るにつれて先程まで今にも尽きてしまいそうに見えた水流が再び勢いを増した。先月の大雨の置き土産なのか谷は倒木で埋まり、私たちは予期せぬアルバイトを強いられた。それでも、小さな滝を幾つか越すと次第に両岸は低く岩は脆くなり、源頭が近いことを知った。湿った腐葉土が覆う浅い窪をたどるといよいよ谷は尽き、ウツボギ沢への下降点である標高1,350メートルのコルと目と鼻の先の尾根に立った。笹の茂ったコルにはあまたの遡行者を見守ったであろうブナの大木が格好の目印となっていた。疎らに笹の生えた斜面からやがて現れた小沢に移り、次第に勢いを増す流れに沿って40分ほど下ると、ウツボギ沢と宝川の合流点である広河原だった。



宝川本流の美瀑で

広河原からも淵をへずったり、落差は3メートルほどしかないがたいそう美しい幅広の滝の前で写真を撮ったり、楽しい遡行を続けた。標高1,200メートル付近では大きな雪渓が沢を埋めており、50メートルほど雪の上を歩いた。真夏にこのような標高の低いところで多量の残雪を見るのは驚きだった。朝日岳から東に伸びる尾根が間近になると、谷の左岸には気持ちの良い草地在り始めたので、1日の行動を終えることにした。泊まり場から目と鼻の先の大石沢出合には巨大な雪渓が居座っていた。夕方の風が運ぶ雪渓の冷気が汗ばんだ身

体に心地良かった。さっそく冷えたビールで楽しかった夏の1日に乾杯した。夕餉には、山田さんが釣り上げた岩魚を骨酒にして賞味し、食後は焚き火を囲んで土方さんの踊りや前田さんのコカリナ演奏などで夜が更けるのも忘れた。

8月6日(日)快晴

泊地5:50 --- 越後烏帽子直下の二俣(標高1,410メートル) 8:20~8:30 --- 烏帽子山と越後烏帽子のコル(標高1,700メートル) 9:30~9:50 --- 朝日岳直下の水場12:00~12:20 --- 笠ヶ岳13:20 --- 東黒沢出合17:00

大石沢とナルミズ沢の合流点の巨大な雪渓は、流れに沿って大きなクレバスを開いていた。谷通しに進めないで、左岸の小砂利が乗って滑りやすい岩をトラバースしてナルミズ沢の河原に降りた。少し谷を進むと、両岸が狭まりゴルジュとなった。右岸沿いに腰まで浸かって最初の淵を過ぎると、その先もしばらくゴルジュが続いた。しかし、両岸の岩が未発達なのでさほど圧迫感はなく、容易に水線沿いの遡行を続けることができた。しばらく遡行を続けると、流れの際の小さな舞台のような平らな岩に3メートルほどの1本桜が枝を張っていた。花の時期に訪れてみたい良い枝ぶりだった。ゴルジュは深そうな釜を持つ4メートル滝で行き止まりとなった。私は空身で左岸沿いに水中をそろそろ進んでみたが、滝まであと2メートルというところで急に釜が深くなっていた。このルートでは後続メンバーからブーイングものだと思い引き返した。左岸の明瞭な踏跡を3メートルほど登ると、台地状の草地在り、ニッコウキスゲとソバナの見事なお花畑だった。高巻きしたおかげでずい分

得をした気分になった。

魚止ノ滝（12メートル）は豊富なホールドに導かれて右手の凹角を登った。滝の上に立つと、上空が開けて谷には開放感が満ち溢れた。真夏の陽の光の粒子が、一粒ひとつぶ私たちの頭上に眩しく降り注ぎ、流れと岩にも飛び跳ねていた。彼方に見えていた緑の稜線が次第に現実的な高さとなって近づきつつあった。谷の正面を仰げば、朝陽に輝く越後烏帽子南面のスラブ壁が私たちを招いていた。あの壁は攀られているだろうか？との高田長さんの問いに、私は思わず広大なスラブにルートを追った。気になったので帰宅後調べてみると、日本登山体系には地元の会がすでにルートを開拓しているが記録は公表されておらず詳細は不明と記されていた。

奥ノ二俣は一面雪に埋まっていた。ここでルートを誤ると手酷い目に遭うので、しっかり磁石をふって進行方向を定めた。源頭までつながっているかに見えた大きな雪渓はやがて途切れ、この谷のフィナーレを飾る、果てしない滑滝の饗宴が始まった。なだらかな緑の稜線に向かうひと筋の水流。流れは青空の懐にその源を持つかのような。適度な傾斜の滝を次々に越すと、やがて両岸には緑の草原が広がり、長い長い滑もようやく尽きるところとなった。私たちは池塘の点在する天上のプロムナードをたどり、ほどなく8月の風が遊ぶ烏帽子山と越後烏帽子のコルに立った。



ゴルジュを遡る



越後烏帽子見ゆ



空へ続く滑滝